

桜まつり

3月19日(土)

時代まつり

# 佐倉城址公園にて開催！

## ドラゴンへの階段 第34回

(連載エッセイ版)「自分で決め、行う、ということ」

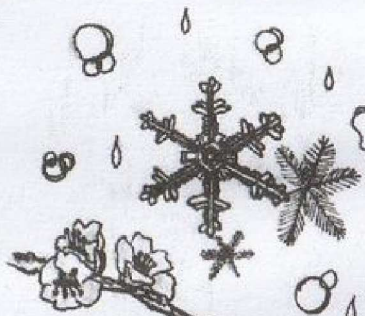
佐藤 洋祐

皆さん、こんにちは！ちょうど先月号のエッセイを書いていた時外は一面の雪景色でしたが、また今回も。どうやら今年が移住してから6年の中で、最も雪の多い千葉になりました。

雪や氷の世界で行われるウィンタースポーツは、今や多くの方々に愛される冬の風物詩と言えらると思いますが、今年はとりわけ冬季オリンピックが開催され、私もアスリートたちの生み出す数々の嘘無きドラマを楽しませていただいています。そんな中で、今回のエッセイはフィギュアスケートのスター、羽生結弦選手から発せられた印象深い言葉について、私の思ったことを書かせていただこうと思います。

フィギュアスケート前人未踏の技、4回転アクセルにオリンピックの場でチャレンジした彼でしたが、満足のいく成功とは言えなかった競技結果に対してインタビュー内で彼のちょっとした言葉が胸に残りました。それは、「(自分のチャレンジは)報われない努力だったかもしれない」という一言。

勝負の世界で勝ち抜いてきた若者にとって、敗戦直後に言葉を求められれば、出てくるのは前向きになれない心の発する嘆きばかりかもしれません。それを発した彼自身が後ろ向きな生き方をしてきた、ということでは全然なく、今は自分が生活のほとんど全てを賭けて向き合ってきた試合に敗れた直後で、口から発せられる言葉以上に彼の心がただただ傷ついている、そういうことではないかなと推察いたします。



佐藤 洋祐(サトウ ヨウスケ)  
ジャズミュージシャン。サクソフォーン奏者としてグラミー賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。

挿絵  
TAKAKO

ただ、私もスターである羽生選手とは程度の差は甚だしい訳ですが(苦笑)、プロスポーツ興行・観戦ビジネスのような世界と同様、音楽というひとつのエンターテインメント、謂わば人間の衣食住のような、生命活動に必ずしもエッセンシャルな分野でないところを生業にしている一人の人間としての観点から、思うところがありました。それは、ビジネスや名譽名聲、生業としてのスケートと別な、「彼の大好きなスケート」で何か新しい世界を切り開きたいと考え、自分で決め、やろうとしたことがあり、その達成を宣言してそこに突き進んだ、それが彼にとっては4回転半だった、ということではないのかな、と。

何かを自分で考え、自分で決め、その達成を目標とすることを宣言し、そこに向かって挑戦することがどれほど難しく、苦しく、時に孤独で、時に大きな後悔を伴い、それでもその過程は多くの学びや充実感、生きる欲びに溢れたものであるのか、私なりに推察申し上げることができます。そしてそこには失敗がつきもの。失敗を、とりわけ真剣勝負の場での誰よりも多くの失敗を経験し、それを糧に自分への課題を克服することだけが、最終的な目標達成に導いてくれる恵みなのです。オリンピックの大舞台と言えども、それはひとつの失敗という貴重な経験でしかないはず、と思います。

彼が4回転半を公に宣言したのはいつでしょう、半年?1年前?もっと前から考えていらっしやったことかも知れませんが、もっともっと失敗して、チャレンジを続けたいっていいのではありませんか?報われたか報われないかの判断は、しばらく先でも。競技スポーツの世界は、選手が多くが20~30代、なかには10代の若さで引退を決定しなければならぬ厳しく儂い世界かも知れませんが、それは別に、あれだけ好きで、尊敬し、愛していらっしやるスケート、思い切り、お金や名譽、順位と関係のないところで、まだまだ好きにトライしていただきたい、というのが、このおじさんの思い。彼はまだ27歳!、僕がサクソスを始めたばかりの歳ですもの。そりゃ、別の分野の事だってなんだって、その気になればできる若さですよ。でも、あれだけ好きでやっていらした事、競技と関係のないところでいいから、もっと挑戦していただきたいありませんか?そして、今この世の中で、とれだけの方が自分で考え、自分で決め、それに向かって突っ走る、そんな素敵なことをやっていらっしやるでしょう?(2022年2月12日筆)